わたしの二〇一七年

W校　高等部二年
ボールドウィン　サラ

世界的に二〇一七年は、特別な年です。アメリカでは、政治経験のない大統領が選ばれました。アメリカは、特に北朝鮮とメキシコとの関係が悪くなりました。日本では、北朝鮮に関して、緊張感が高まりました。また、天皇陛下はこれまでの慣習に反して、引退することに決めました。日本とアメリカにとって、二〇一七年は重大な年です。

私にとっても、さまざまなことが起こりました。私は、今年、「オールイースタン・オーケストラ」のメンバーに選ばれました。このオーケストラは、アメリカ東部十八州からオーディションで選ばれた高校生達が集まり、難しい曲を練習してコンサートをするグループです。そして、現地校では、最終学年の高校三年生の年が始まりました。前年度より勉強量が多く、また、大学受験が間近となり、

ストレスを感じるようになりました。

二〇一七年は、いろいろな人にも会うことができました。例えば、国連のイベントに参加したとき、芸能人のピコ太郎や、政治家の岸田外務大臣に会うことができました。世界的に有名なピコ太郎は、とても優しい人でしたし、岸田外務大臣は、意外と普通な人でした。また、ACLU という団体のサマーキャンプに参加したとき、元 CIA 職員のエドワード・スノーデンと話すこともできました。映画にまでなったエドワード・スノーデンは、世界で一番大きいアメリカという国を敵に回しても、自分を失わず、前向きに生きている人でした。このように、一生会えないと思っていた人達に会えて話すことができたことは、これからの自分の人生に良い影響を及ぼすことでしょう。

このように忘れられない出来事が起きた二〇一七年ですが、一番記憶に残ることは、一月二十一日に世界中で起きた「ウィメンズ・

マーチ」でした。このマーチは、全世界の大きい都市で、女性の権利を信じていないドナルド・トランプが大統領に選ばれたことを反対する目的で行われました。私は補習校があったため、ニューヨークのマーチに参加できませんでしたが、私の母は行くことができました。テレビで、世界中の人々がマーチに参加するシーンをみて感動しました。世界中の人がひとつの目的で集まることができる証拠でした。

しかし、二〇一七年は、多くの問題も浮かび上がりました。トランプ大統領は、アメリカの政府や国民のことを考えずに無謀に行動する、安倍総理大臣と友達になり、総理大臣はアメリカに従うようになりました。トランプ大統領はTPPとパリ条約から脱退しました。これは国民の将来を壊す行動です。今後、いろいろな問題が起きるでしょうが、今の問題が解決することを願います。でも、そう簡単には解決しません。みんなが集まって、一緒

に関わらないといけません。これから起きることが心配です。地球温暖化、政府、政治、戦争、権利などの言葉がよく聞かれるようになるでしょう。これからもトランプ大統領はまだアメリカの大統領で、安倍総理大臣は日本の総理大臣でしょうから、政府はあまり変わらないと思いますが、人々が動かすムーブメントがどのように起きるか楽しみです。今アメリカで起きている移民問題や、人権の問題などが、さらに人々の人生にとって重要なものとなるでしょう。このようなムーブメントは、この前まで考えもしなかった人達の信念を変えると良いと思います。

このように、二〇一七年に起こったことを全体的に見れば分かります。二〇一七年は特別な年です。

いろいろな小さなことが起こっている間に、人々はひとつになっていきます。政治では、分かれているかもしれませんが、人間としてひとつになっていきます。問題が「問題」

であると人々が気づいたとき、人々がひとつになっているということです。ウィメンズ・マーチや、いろんな反対運動はその証拠です。

大統領や、政府の偉い人、テレビに出る人達の意見を自動的に信じるのではなく、自分が正しいと信じて生きる。そう思っている人が、今年は増え、これからますます増えていくでしょう。

だから、私は、二〇一七年が人間にとって、再び希望を持つ年であると信じます。

今年の夏

W校　高等部一年
ヘイズ ガイタノ

僕は、今年の夏、日本で、小畑産業という会社で、一週間インターンをする経験が与えられました。そこで、たくさんのことを学ぶことができました。会社の社員の方々から色々なことを学び、会社の説明を、僕のために簡単に分かりやすくしてくれました。

小畑産業は化学の製品を買い、そして売る仕事をしている商社です。鉄鋼業関係の商品から、食品関係の商品まで、幅広くビジネスをしています。今回、僕は、社員の方々に、お客様の工場に連れて行ってもらい、どのように小畑産業の製品を使っているか、どのように社会に出しているかを教えてもらいました。

僕は、このインターンで、色々なことを学び、気づきました。一つは、お客様に対応するとき、日本人のあいさつとアメリカ人のあ

いさつが違うことに驚きました。日本人は、お客様に敬語を使います。英語には敬語がなく、英語でも他の言葉を使うけど、日本語みたいに、丁寧な言葉では、ありません。また、お客様と会ったとき、社員の方々は丁寧で、声に力がありました。それにも、僕は気がつきました、僕も声に力を入れなければならないと思いました。そして、インターンをしている期間で、だんだん、僕の声は力が入ったと思います。そして、一生懸命、敬語を思い出し、自分なりに、頑張りました。

もう一つ学んだことは、ビジネスは全てのお客様をケアし、必要なものを提供し、彼らの話を聞いて、彼らと交渉して、自分とお客様が幸せになれるようにすることです。滝川さんという社員の方が、会社訪問に連れて行ってくださったときに、このことを教えてくださったように感じています。

この時、三種類のお客様との交渉を見せてもらいました。最初のお客様との交渉は、価

格についてでした。彼は彼らに価格を下げることを望んでいました。滝川さんは、交渉に成功しました。第二のお客様との交渉は、全て話しを聞くことでした。私たちが出会った人は、中国への旅、そして、その国が日本とどう違うのかを話してくれました。彼の話は、おもしろかったけど、長くて疲れてきました。でも、ビジネスの一部は話を聞くことなので、何か他のことについて考えないように、疲れて見えないようにしなくてはいけないと思いました。最後のお客様との交渉も話し合いでした。そのお客様は、会社の情報をくれ、パンフレットもいただきました。

それぞれのお客様に会うことで、僕は、聞くことと相手の目を見ることが非常に大切だということを学びました。

この一週間を通して、僕は色々な学習ができました。小畑産業の社長さんが僕を受け入れてくださり、また、社員の方々が、あたたかく指導してくださったおかげです。感謝し

ています。この経験の機会は日本でそんなにないので、経験できて、うれしかったです。一番学んだことは、ビジネスでは、みんなをケアーをして、人の気持も考えることです。これからも、この学んだことを、心に入れて人生を生きていきたいと思います。

サマーキャンプ

W校　中等部三年一組
若松　みなみ

去年行った泊まりのキャンプに今年も参加することになった。アメリカでは、夏はサマーキャンプに行くのが普通だと聞き、友達に誘われて行くことにした。しかし、去年まだ引っ越してきたばかりだった私は、英語がほとんどわからなくて大変な思いをした。例えば、同じ部屋の子が笑いながら話をしていても何が楽しいのかわからない、スタッフの人がゲームの説明をしていても分からないなど、わからないことばかりでつらくて早く帰りたくてしょうがなかった。さらに熱まで出してしまったので、正直去年のキャンプはよい思い出がほとんどなかった。でも自分がどれくらい成長したか確かめるにはよい機会だと思い、今年も参加することにした。「英語が分かるかな。」「また熱を出したらどうしよう。」「新しい友達を作れるかな。」など様々な

不安と期待を抱えたまま家を出た。

キャンプ場に到着した瞬間に腹痛に襲われ、すでに帰りたくなってきた。キャビンにつくと、カウンセラーの人が健康チェックのために質問を始めた。去年は言われていることが分からず、辞書を片手に泣きそうになりながら答えていたことを思い出した。しかし「何がそんなに怖かったのだろう。」と不思議に思ってしまったほど簡単な質問ばかりだった。「今年は大丈夫な気がする。」自然に自信が出てきた。

外で同じキャビンの子たちがフリスビーで遊んでいた。声をかけて仲間に入れてもらえばいいと分かっていたのだか、普段英語を話すことを避けてきた私は「通じなかったらどうしよう。」と臆病になってしまった。でも「去年より楽しいものにしよう。」そう自分に言い聞かせて声をかけてみた。すると案外あっさりと笑顔で「もちろん！」とみんなが言ってくれた。さっきの健康チェックと同様に「自

分は何を怖がっていたのだろう。」と不思議に思った。遊びながらお互いの名前を覚えることができて、自分から声をかけて本当によかったと思った。あと、同じキャビンの子が優しいことが分かって安心した。

部屋に入って自己紹介をすることになった。キャビンは一緒でも行動班は二つに分かれていた。自分の出身地、好きな食べ物や映画などをみんなで言い合った。ほかの人も緊張してそうだったので、自分一人だけじゃないと分かってほっとした。自己紹介を聞いているとき、他のチームに日本のキャラクターの靴下を履いている子を見つけた。自己紹介が終わったら話しかけてみようと思ったが、チームごとに別れてしまい、機会を逃してしまった。そのあと、カウンセラーがキャンプ中に流してほしい歌を募集していた。紙を見てみると、私の知っているアジアのアーティストがリクエストされていた。今思うとおかしいが、なぜか絶対にあの靴下の子だとパッ

と来た。

夕食後、またキャビンで集まった。健康チェックやフリスビーのこともあったがまだすこし不安だった。しかし、自分を励ましながら「〇〇〇〇好きなの？」と声をかけてみた。するとやっぱり私の勘は当たっていて一瞬で盛り上がって、一日目ですっかり仲良くなれた。

それから毎日チームは違ったけど、色々なアーティストについて語り合ったり、トランプゲームをしたりして、もっと仲良くなれた。同じキャビンの子たちとも、一緒にキャンプファイヤーをしたり、色々なレクをしたり、ご飯を食べているうちに自然に仲良くなれた。また、自由時間に家族や学校の話をしたりしてすっかり友達になっていた。去年は早く帰りたくて仕方がなかったのに、今年はあっという間に最終日になってしまった。話し合いをしなきゃいけない時など、私が上手に話せなくても、みんなが助けてくれて本当に

助かった。最後にみんなで書きあったメッセージには「いつも明るく話しかけてくれてありがとう。楽しかった！」など書いてくれて心が温かくなった。

今年のキャンプを通して、自分の成長を確認することができた。英語だけではなく色々なことに自信がなかった私が、自分から話しかけて新しい友達を作ることができたのだ。また、マイナス思考でいても楽しくないと実感して、この夏で何事もポジティブにとらえられるようになった。自分の性格ももっと明るくなれたと思う。九月から始まった高校生活でも、もう新しい友達を作ることができた。このサマーキャンプで学んだ「自信を持つことの大切さ」英語だけではなく他の行事や何事にも生かして、積極的に行動していきたい。

差別、平等性とは

W校　中等部三年一組
荒木　翔満

「人は、生まれつき皆平等である」これはかの有名なトーマス・ジェファーソンがアメリカ革命のとき、独立宣言に書いた言葉である。だが、自分はたびたびこう思う。「果たして、本当に人は生まれつき平等であるのだろうか？」確かに、生まれたころは世界についてなにも知らず、新しく誕生した人間であり、こう見れば平等なのかもしれない。しかし、そのあとはどうだろう。生まれ育った環境では、圧倒的なまでの差が生まれ、才能も含み、結果として平等ではなくなってしまう。さらに、生まれつき皆平等というが、先天性の障害を持つ人間はどうだろう。障害を持って生まれる子は、それだけ日常の生活や学校での生活が不便になる。大人になったとしても、障害によっては自立できない場合もあり、それだけで仕事でのチャンスなどを失うこともあ

る。これを前に、果たして人は本当に「人は皆生まれつき平等である」といえるのだろうか？自分はそう思わない。もし、皆が平等で差別もない世界があるのだとしたら、それはすべての人間がひどく冷遇された世界。つまり、「平等」という言葉を盾にしたディストピアなのだ、と強く思う。

人は生まれつき平等だとしたら、それは生まれた時だけである。世界中の人々の土地を奪い、平等に生きるためだけの最低限の資金を与えるのも可能だし、能力によって生徒を区別する「塾」みたいなシステムもなくし、「平等こそが至高」と思わせる学校も作りたければ、設立することは可能だ。しかし、一つ、不可能なものがあるとしたら、すべての人間が成長していく中、全員平等にチャンスを与えることだ。人は生まれ育った環境が人生を全て決める、というのは過言ではない。例えばプロの音楽家の両親を持つ子と、弁護士を両親に持つ子がい、その子供は二人ともプロ

の音楽家を目指しているとする。プロの音楽家の両親を持つ子は必然的に弁護士の両親を持つ子より音楽の才能もあり、音楽家として成功する「可能性」も高い。生まれたときには平等なはずの二人の子が、育つ環境の違いで、最終的には同じはずの音楽家としてのレベルに差が出るかもしれない。これは仕方のないことなのかもしれない。親の職業の違いにより、才能や環境、あらゆるものが二人の子供の間で異なっていたのである。もう一つ例を挙げよう。安定した家計、両親も環境も特別ではない、すなわち「普通」な環境で育った子供がいるとする。成長していく環境に劇的な変化はなく、普通に大学へ行き結婚する。もう一人、子供がいるとしよう。生まれたときには普通の子と一緒である。しかし、片方の親がタバコを吸うアルコール中毒者だとする。ビール缶と煙の臭いだらけの環境ではろくに勉強もできず、普通の子と比べ、「落ちこぼれ」となってしまう。これは果たして

平等なのだろうか？生まれたときは平等でも、環境によって差が生まれる。親と環境により平等に与えられたチャンスを奪われてしまったのだ。そう、二人の人間が平等に育ち、平等なチャンスを与えられることは絶対に不可能なのだ。

男性と女性は平等ではない。これは事実である。男性の体の構造は女性とは全く異なるものだからである。そのため、男女に適した職業は異なる。これは仕方のないものだ。それを、世の中には「男性が社会では優遇されている」と思い、ている。女性は冷遇されている」と思い、これを差別という人も少なくはない。確かに現代社会には男性に向く職業が存在し、女性には難しい業種もある。だがこれを見て、「女性はもっと優遇されるべきだ」と思い、無理矢理女性を採用する人もいる。自分はこれを差別だと思う。女性が冷遇されているのであれば、逆に女性を優遇すればいい、という考え方は間違ってはいないと思う。とはいえ、そ

れなら今まで優遇されていた男性が今度は冷遇されてしまう。つまり、差別は必然的であり、解決もできないのだ。これにより平等という言葉もウソになる。だから、自分は平等というのはただの願望だと思う。

男女平等、学校でも習う言葉だ。「男性と女性が皆平等に暮らせる社会が人類にとって大きな進歩になる」。自分はこれを否定しない。だが、同時に肯定もできない。平等とは常に人が追い求めるものであり、同時にかなわないものだと思うからだ。生まれたときは平等かもしれないが、その後の人生は違うと思うからだ。自分はその違いを受け入れた上で、差をつけるのが真の平等だと思う。上に人がいなくては、何もまとまらない。下に人がいなくては、社会が機能しない。人が人の上に立つことは必然だ。だからこそ、社会が成り立つが、平等ではない。自分は、人が皆平等とは思わない。なぜなら、それが世界の残酷な現実だからだ。

日本に帰って気付いたこと

W校　中等部三年一組
榎島　蓮太朗

私はこの夏、日本に二週間ほど帰国した。アメリカに来てから一年しか経っていなかったが、日本に帰って色々な変化を感じた。帰国した二週間のうち、最初の一週間を愛知県の実家で、残りを一年前にいた千葉県で過ごした。今回の旅で私は、一年間の日本の変化やアメリカとの違いなどを体験することが出来た。

私が日本に着いてまず感じたことは湿度の違いである。日本はこんなにもじめじめとしていたのか、この湿度の夏を私は人生に十五回も経験したのかと、思わず己の記憶を疑う程に日本の夏は狂っていた。そして次に感じたのは時差である。私が感じたのは時差ボケではなく、純粋な時差だ。アメリカを出国したのは土曜日の朝であったが、着いたのは日曜日の夕方であった。時差の存在を知ってい

たのにも関わらず、タブレットをインターネットに繋げて時間が調整されたことを確認した時、私は生まれて初めて目玉が飛び出る感覚を味わった。夏休みであったことが幸いであったが、もし翌日が平日だったら私は真面目に仮病について検討していただろう。

初めの一週間で一番楽しみにしていたことは、従姉妹に会うことだった。実は今回が彼女に会ったのは生まれて初めてだった。というのは、彼女は今年の四月に生まれたばかりだからである。また、私にとって彼女は人生初の従姉妹でもあるので、非常に楽しみであった。実際に会った時に思ったことは「大きい」である。我ながら可愛いよりも大きいという感想が先行したことには驚いている。母に事前に見せてもらっていた写真を見て想像していた大きさと違った、というのも一つの理由だが、一番の理由は従姉妹の血の繋がっている方の親が非常に小柄な体格をしていたからだ。今回の旅で会った新たな親戚は従姉

妹だけであったが、父の従姉妹たちが子どもを授かった話と、父の別の従姉妹たちが結婚した話をサプライズで聞いたので、また日本に帰ることが今からでも楽しみだ。

次の一週間ではアメリカに来る前の友人と会った。この一週間は衝撃的な出来事が多かった。その出来事の多くは同じ中学校の友人についてである。例えば、同級生が最高学年になっていることに私は驚愕した。最後に会ったときは二年生だったのに、いつのまにか三年生として、後輩と話している友人の姿を見て、言語化できない不思議な感覚に襲われた。また、友人の成長にもショックを受けることがあった。一年前は周りから「可愛い」と満場一致で言われていた友人が、身長が私とほぼほぼ変わらなくなり、声も二オクターブ程低くなっていた。他に友人のことで驚いたのは、小学生の頃から仲の良かった友人が不登校になっていたことである。部活動についても私がいたときと比べると大きく違う点

があった。その一つが人数の違いである。私が演劇部に入ったときは十二人で、男女比が七対五であったのだが、今年の部員は二十人を超え、男女比も一対六と圧倒的に女子部員が増えており、来年の新入部員次第では男子部員が一人だけになるそうだ。練習内容や上下関係も大きく変わっていた。部員の数が少なかったときは上下関係と練習、共に緩いと有名な部活だったが、今の上下関係は野球部顔負けになっていたり、練習も週二から週四になり、夏休みも可能な限り部活の予定が入っていた。このように、私のいなかった一年で、私の生きていた環境は著しい変化を遂げていた。

しかし、変化しかなかったわけではない。学校の先生方は去年とほぼ変わらず、学校へ一年ぶりに行っても、フレンドリーに接してくださった。また、塾の先生方もとても優しく、塾内で仲の良かった友達を呼んで出迎えてくださった。他にも、これはあまり良いこ

とではないが、巷では「永遠の工事」とも呼ばれ、都市伝説になろうとしている工事現場には何ら変化は見られなかった。変化するということは良いが、変わらないことも安心感があって良いと感じることもあった。

今回の旅を通して、一年という時の長さを思い知ることができたように思う。人生の八割を過ごした日本にいたのに気づけなかったことや、親戚や友人の変化など色々なことに今回の旅で気づくことができたように思う。この二週間は私にとって極めて有意義な時間であった。

私の使命

L I 校　中等部二年
武井　蓮乃

時々、私は補習校の宿題に取り組んでいる時に、「なぜ私は補習校に通うのか。」と疑問に思ったことがあります。同じ現地校に通う生徒達は、土曜日も日曜日も休みなのに、「なぜ私だけが週末も学校に通い、毎日、毎日勉強をしなくてはならないのか。」等と日々頭の中でくり返し思っていました。

ある日、私がたまたま見た番組に私は驚きを隠せませんでした。それは頭の良い学生達が出るクイズ番組でした。その番組に出ていた人は皆、小学生で並み外れた頭脳の持ち主でした。その中には一日十二時間の勉強をしていたり、全国模試で四回、一位を獲得している子などがいました。私はこの番組を見た後に、急に恥ずかしくなりました。学校の授業以外に、三、四時間しか勉強していない私に比べると違いは一目瞭然です。今の学力で

満足していないで、もっと上を目指そうと決意しました。

更に、私はとても恵まれていることを改めて知りました。日本人の両親を持ち、アメリカで生まれ育っている私は、アメリカでは「日本人」というカテゴリーで、日本では「アメリカ人」というレッテルを貼られているような気がしていました。しかし、私はこれで良いのだと気付きました。日本語も英語も出来て、色々な国の文化について知ることの出来る環境にいる私はとても恵まれています。日米両国の言葉と文化を学んでいることが、今の自分を作り上げ、ひいては自分の将来にも生きてくるのだと分かりました。もっと、色々なことを学んだり、経験したりして、アメリカで生まれ育った日本人として、日米の架け橋になれるような人材になりたいと思います。

最後に、私の人生においての「使命」に付いて考えました。自分の「生きる意味」、「

理由」は人それぞれですが、日々の経験に基づいて考えれば良いのだと思います。私の使命は人を助ける仕事に付くことだと思います。なぜなら、恵まれた環境で育った私は自分が学んだり経験したことを社会に還元するべきだと思っているからです。身に付けた知識や経験をいかして人々の役に立ちたいと、心からそう思いました。そのためにも、日々学び自分を高める努力をしていきたいと思います。

20×20

本当にすごいもの

W校　中等部二年二組
宮西　あかね

「わー、すごい。」

私の口癖だ。最近気がついた。何に対しても、すごいと言ってしまう。例えば、エジソンの発明は、すごい。これは確かだ。七月中に、夏休みの宿題を終わらせることが出来る人は、すごい。落としかけた夕食のトマトを、ぎりぎりのところでキャッチできたら、すごい。二匹の赤い金魚を見分けられるようになった、と妹が自慢していた時も、

「へー、すごいじゃん。」

と、私は言ってしまった。でも、どうでもいい。すごいのに、どうでもいいのだ。

私は、その日の自分の言動をリプレイしてみた。すごい、と言ったことはたくさんあったのに、その中の「どうでもいい」率はかなり高いのだ。もう「すごい」という言葉の意味すらも分からなくなった。そうだ、辞書で

引いてみよう！――いや、やっぱりやめておこう。今、自分にはもっとやるべきことがあるはず。少し寝転がって考えることにしよう。

私のめんどくさがり様は、すごい。

数週間後、八月のある日。宿題はまだまだ終わらないが、自分の中には変な余裕があり、焦る気持ちはなかった。それに、今日は勉強なんて考えない、と決めていた。八月になってやっと帰国した父も一緒に、今日は、久しぶりの家族でお出かけの日なのだ。楽しむことは、許されるはず。

大阪府池田市にある、インスタントラーメン発明記念館。いつか、テレビで見たことがあった。たしか、自分だけのカップヌードルを作ったり、いろんな展示を見ることが出来るのだ。ふーん、すごい。

記念館には、今までに発売されたすべての即席めんを壁に飾った展示があった。その名も、インスタントラーメン・トンネル。発売日順に並べられた、大量のパッケージ。ざっ

と見渡しただけでも、数百はあるとわかる。

部屋の反対側の方から、妹が走ってきた。向こう側の壁は、どうやって即席めんが生み出されたか、そしてその開発者、安藤百福がどうやってそれを世界中に広めたのかを表した展示だった。小さな子供も楽しめるよう、引き出しが開いたり、ハンドルが回せたり、様々な工夫がある。文章は仕掛けの上に、想像していたよりもぎっしりと書かれていた。

何となく近づいてよく見てみた。そして、最初から最後まで見終わったとき、私は自分が何も言えなくなっているのを感じた。

戦争で負けた直後の日本。食糧不足で困っている人たちが、一杯のラーメンのためだけに列を作っている光景を、安藤百福は忘れられなかったという。何とかして、みんなが手軽にラーメンを楽しめるようにすることは出来ないだろうか。即席めんの研究は、ここから始まった。

問題は次々と出てきた。安全性、機械で大

量生産する工夫、値段、それから外国の人に認めてもらう方法…。しかし、一つ一つの問題とじっくり向き合うことで、即席めんは進化を続け、ついには誰もが一度は食べたことがあるほど人気で身近な存在となっている。今では、宇宙食の研究も進められている。

ざっくりまとめると、こんな内容だった。別に感動するほどの話ではないかもしれない。けれども私は、すごい、と思った。いつもとは違う、すごいだった。

人々のために始め、人々に喜ばれたこと。世界に無かったものを、作り出したこと。そして、誰にでも出来たかもしれないのに、誰も挑戦すらしなかったことを、やり遂げたこと。

「すごい」という言葉を、辞書で引いてみた。明鏡国語辞典によると、「感嘆に値するほど素晴らしい」ことらしい。

ただ単なる驚きではなく、何かに挑戦したい、と思わせる刺激を「本当にすごいもの」

がくれるんだと分かった。

初めての一人散策

東京編
L工校　中学二年一組
石原　理生

今年の夏、僕の体験したことの中で一番印象深いのは「一人で考え、一人で行動する」ということです。

補習校が夏休みに入ってすぐ、僕は母と日本に行きました。夏の休暇というより休調の悪いおばちゃんのお見舞いが、一番の目的です。いつも介護で大変なおじいちゃんの代わりに留守番したりすることも多く、あまり外出はする機会はありませんでした。

ある日の夜、おじいちゃんが言いました。

「明日は、息抜きに友達とパチンコに行くから、お留守お願いな。」

それを聞いた母は僕に、

「浅草でも行って来たら。」

と言いました。僕がポカーンとしていると、

「一人で。自分のお金で。」

と母が付け加えました。アメリカ生れアメリ

力育ちの僕は、日本の子供のように一人で遠くまで出かけたことはありません。だから、一人で外出は、とても魅力的です。しかし、自分のお金でと言われるとなぜだか素直に喜べません。二時間くらい考えて、僕はようやく出かける決心をしました。

翌朝、僕は出掛ける支度をしました。出掛ける前に、母から、おじいちゃんへのお土産に人形焼を買ってくるように頼まれました。

「お金は立て替えておいてね。レシートを持って来たら、ちゃんと返えすから。」

僕はどきどきしながら出発しました。行く途中、お金をなるべく便わないようにしようと思りました。駅で電車を待ちながらリュックの中を見ると、ハッと気づきました。水筒を忘れてしまったのです。後悔しました。周りの自動販売機を見ると、好きな緑茶が百六十円、一番安いのは百十円の水です。まよわず水を買いました。僕は、いつも値段なんか考えていないのにおかしいなと思いました。

祖父母の家は立川市にあるので、東京中心まで三十五分位かかります。電車に乗り込み、今日の道順を考えました。銀座線乗り換えの上野駅にはどのように行ったらいいのだろう。山手線は、まだラッシュ時間の余韻が残っていて込んでいると予想しました。だから、なるべく山手線を避ける作線を考えました。僕は、電車好きなので、路線図はほとんど覚えています。同じJRシステム内なら、お金はかからないし、色々な電車も乗ることができます。思った通り混雑を避ける作戦は成功しました。

とうとう浅草につきました。駅の出口には、「銀座線浅草駅」と書いてある提灯が飾ってありました。かわいいから写真を撮りました。誰かと一緒だと、立ち止まれないようなものにも、一人だと時間をかけて、写真がとれて、楽しいです。

地下鉄から出て外を歩きながら、どこに行こうかなと考えました。「やっぱり浅草とい

えば、「金のウ●チビル」（浅草朝日ビールビル）だよなー」と思ってすぐ振り向くと、そこにデーンと建っていました。思っていた通りのことがなって、なんか有頂天になりました。

浅草の雷門は、観光客で込んでいました。ツアーガイドが、お客にどこから来たのとかを尋ねると、「鹿児島」「イギリス」等の答えが聞こえました。僕は、雷門が日本だけではなく、世界でも有名だと知りませんでした。しかし、雷門は提灯以外は修理中でよく見ることができませんでした。少しがっかりしました。

仲見世通りでは、お土産の人形焼を買うのに苦労しました。五回くらい商店街を往復したり人に聞いたりして、やっと買えました。

レシートももらいました。浅草寺の境内から、スカイツリーが見えたので、写真を撮りました。五重塔とスカイツリーを一枚の写真に収めたくて、いろいろと工夫しましたがう

まくりかず残念でした。

帰りは、沢山寄り道をしました。JR線の乗り回しです。母と一緒なら絶対できないけれど、一人なので気ままに好きな駅にたりて写真を撮。たりしました。改札さえ出なければ、余分なお金もかかりません。散策中は、お金が盗まれなりように、バックから見を離さなりように、身の向りの事を注意しました。交通費の他は水一本しかお金を使わずにすみました。

このフー人で考え、一人で行動するピという散策の経験から、僕は少し成長したと思います。初めから終りまで親から言われたことをするのではなく、自分で考えながら行動したり、お金を使ったり、身の安全を考えたりすることができたからです。責任もあるけれども、自由を味わうことができ、とても思い出深い一日を過ごすことができました。

初めてアメリカで過ごす夏

W校　中等部一年一組

榎本　葵

私は、この夏休みアメリカに来て初めての夏だった。そして私はサマーキャンプに行った。キャンプの最初は初めてのこともいっぱいあったし、緊張していた。それに少し怖かった。でもリーダー達がやさしかったし、楽しいゲームもあって安心した。グループ内では知っている人同士も多かったし、英語が多かったから少し大変だった。だけど、夜に行う反省会の時に、リーダーがなるべく日本語を話すようにしようと言ってから、グループのみんなが、日本語が苦手な人も日本語を話すようになってくれたからうれしかった。だんだんみんなの仲も良くなってきて楽しくなってきた。

二日目にはアクアティクスの泳力チェックがあった。泳力チェックでは一番上の緑バッジをもらうことが出来た。立ち泳ぎが少し難

しかったけど、クリアして達成感を味わうことが出来た。最初は立ち泳ぎを二分間なんて絶対に無理だろうと思っていたのにクリア出来たから、なんでも挑戦してみる事は大切だと思った。

他にも二日目からは色んなアクティビティが始まって、初めて挑戦するものもあった。「スパイダーウェブ」というクモの巣のようなものをひもにあたらないようにみんなと協力したり、Tシャツに色をつけたり、アーチエリーをしたり、たくさん楽しい事が毎日あった。みんなで協力して何かを成功させたり、たくさんの事があった。だから何かを乗り越えていくたびに仲が良くなって絆が生まれていった。

他のグループと遊ぶ事も多くなって友達もたくさん増えていったし、たくさんの人の名前を覚えてどんどん仲良くなることが出来た。

グループタイムの時に室内でウインクキラ

ーをしたり、トランプで遊んだり、外で遊んだりもした。たまに他のグループとも遊んだりして盛り上がって楽しく過ごすことが出来た。

毎日、食事の時にキャンプソングを歌った。聞いたことのある歌もあったけれど、初めて歌う歌もあった。毎日歌うからたくさん覚えていって、みんなでそうじの時に歌いながらそうじをしたりして、どんどん毎日が楽しくなった。グループのみんなと一緒に歌っているとより仲良くなった気がした。

毎日過ごしているうちに、あっという間に一週間がたった。そして私たちはスリープアウトに行った。本当ならハイキングをして目的地まで行き、その後、枝を集めたりして力レーを作ったり、お米をたいたりする事になっていた。でもハイキングの途中で道に迷ってしまって、もともと三十分位で着くはずだったのに一時間ほどかかった。その分みんなとたくさんお話が出来たから良かった。枝集

めは大変だったし、カレーの野菜は少しかたかった。でもキャンプだと思えば楽しかった。みんなでマシュマロを焼いてスモアズを食べたのもおいしかった。夜は遅くまで起きてみんなでしゃべっていた。とても楽しいスリープアウトになった。だから私はこの二週間のキャンプで一番心に残っている。初めてのことだし大変だったりもしたけど、チャレンジしたらとても楽しかった。

そして私がもう一つ心に残っているのは、「そうじチェック」だ。私たちのグループは初日に三位を取った。それからどんな工夫をすれば一位を取ることが出来るか考えた結果、折り紙をかざったり、花をかざったりしようということになった。そして次の日に部屋をかざったらその日は一位を取ることが出来た。その後からも色んな工夫をしたら、上位を続けて取ることが出来た。みんなで考えて一位を取ることが出来たからうれしかった。

アメリカに来て初めての夏休みだったけれど、初めてのキャンプの、長くあっという間に過ぎていった二週間をとても楽しく過ごすことが出来た。私はこのキャンプでたくさん挑戦することが出来たと思う。大変だったこともあったけれど、それを「楽しい」に変えることが出来た。だからこれからも色んなことに挑戦してもっと色んなことが出来るようになり、楽しく過ごしていきたいと思う。とっても楽しかったキャンプはまた来年も行きたいと思う。これからもアメリカでどんどん楽しく過ごしていきたいと思う。

ばかだね

中一　福島　光

ガシャーン！

「光！！！！」

エクアドルでの最後の夜だった。これから、みんなにさようならを言ってニューヨークに戻ろうとする、その直前の事だ。

その日の昼間はいつもと同じだった。いとこや親戚たちと朝から遊び、お昼前にアンダコーチャという由緒ある教会に、安全にニューヨークへ帰れるように親戚一同で安全祈願に行った。

アンダコーチャは、父がニューヨークへ行く前に必ずお祈りに行く教会で、父の家から一時間くらいかかる。日曜日だったので、牧師さんの話を聞いた後、ろうそくに火をつけてお祈りした。

僕は今回のエクアドル旅行が本当に楽しかったことの感謝と、それからニューヨークへ安全に帰れるようお願いした。

その後家に戻って、この二週間毎日していたように、いとこたちとサッカーやゲームをして遊んで帰るまでの時間を過ごしていた。サッカーをしていた時、ボールが屋根に上がってしまったので、僕は二階に上がってバルコニーから屋根に飛びのった。

その瞬間、飛び乗ったところが抜け落ちて、体を地上に打ち付けた。思いもしないことだったから、何が起こったかその時はよくわからなかった。

次の瞬間、母や父やおじさんたちが外に飛び出してきた。

父が僕を抱き上げようとしたけど、動かされると気分が悪くなった。母が動かすな！と何度も叫んでいた。

あまり良く覚えていないが、しばらくこの状態でいたように思う。ファニーおばさんが、泣いていたような気がする。この時、見送りに来ていた親戚もたくさん集まっていたから、大勢が固唾をのんでいたようだ。

幸いなことに、ケガはわきの下のすり傷だけだった。

きっと昼間のお祈りがあったからだと思った。

そして、楽しさや興奮に負けて考えずに行動する自分の愚かさを知った。

少し良かったことは、ニューヨークへ戻るときいつもだったら親戚たちは悲しくて泣くのに、この事件で動揺した一族は全員わけのわからぬまま別れのあいさつをしたことだ。